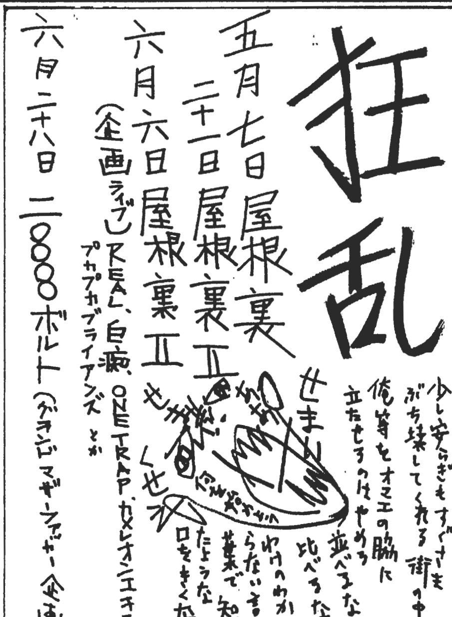
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

８４号 1994.5.7.
文・編集・発行
恋 怪子

LIVE：狂乱

1994.3.29　4.20 高円寺屋根裏II
4.26 下北沢屋根裏　5.3 高円寺 20000V

photo by k.k.



ピカートの「沈黙の世界」によれば、私たちは沈黙の実体を失った世界に生きており、私たちのまえに存在する、あまりにも過剰にあるため私たちが愛や情熱をもつことのできない事物を自己に無理やり関係づけようとして、私たちは事物をタイプ分けし、また事物を饒舌で蒸発させていることになる。
バンドやその音楽について書かれたりや話されることの多くが、「〇〇のようである」といったタイプ分けや「パンクである」とか「ブルースである」といったジャンル分けと、それを説明する知識の羅列というようなものでしかなくて、そういうものを読んだり聞いたりするといつも「だからなんだっていうの？」という疑問をもつのだが、ピカートの「沈黙の世界」を読んでどうしてそうなのかがよくわかった。あまりにも多くのバンドや音楽が私たちのまえにあり、それらに攻めたてられるような状況のなかで、そのバンドや音楽そのものに答えるための愛や情熱がないとすれば、タイプ分けやジャンル分けをするのは当然の反応であり、その説明だけに多くの言葉をもってするのは、バンドや音楽＝事物を知識の饒舌でかたずけようとするからに他ならない。

ピカートは詩と沈黙について「詩は沈黙から生じ」、「詩人の言葉はみずから沈黙を生み出す力を持っている」、「沈黙がおのずからありありと現れるほど、それほどにも言葉は強力で、また完全無欠に言葉であることが出来」、「完全な言葉の反響として、完全な沈黙が聞こえるのである」と書いている。

狂乱にはこのとおりのことがいえる。狂乱を聴くと深い沈黙がおとずれるのだが、それは狂乱の詩は、「沈黙から生じ」た「完全無欠に言葉であることが出来」ている詩であるということである。

さらにピカートは「（現代の詩は）ありとあらゆる言葉から生ずるのである。そして、ありとあらゆる言葉へうごいて行く。そこには大抵の場合、言葉によってもたらされるべき一つの事実さえもない」そして、「それに反して、真の詩人は事実を持っている。そしてこの事実から言葉を求めるのである」と書いている。

これは、同じような歌詞(ことば)なのに、どうして説得力のあるものとそうでないものがあるのかということに対する明快な答えである。『事実を持っている』ことから生じたものと、『事実についての言葉を持っている』ことから生じたものとのちがいである。後者だと「あ、そう。それで？」ということになって、そこには「言葉によってもたらされるべき一つの事実もない」。これと同じことをジュンがDOLLのインタビューでいっている。
「歌詞が具体的って気がしないのは、その内容がだぶんひとつのものにたいしてというより、すごく全般的に当てはまるものが多いからなんですよ」
事実から生れた詩＝具体的で説得力がある。
言葉から生まれた詩＝全般的で非具体的、説得力がない。
３月29日屋根裏IIの狂乱のライブは髪の毛が逆立つほどのものすごいものであったが、事実を持っている詩によってまさしく一つの事実がもたらされるという体験をした。「ブレイン・シェイカーブレイン・ミキサー（電車）」を聴いていて、その何日か前に町田に「ボードレール展」を見に行った帰りの電車のなかで感じた事実(こと)がもたらされたのである。少し離れた向かい側の席に座っている若い男女の二人連れが、ずうっとじゃべりつづけていて、とくに男の方がしゃべっていて、その様子が気になったのがキッカケで気分が悪くなった。まわりの人間もみんなロボットのように思え、窓の外の風景にも何もいきいきと感じるものがない。吐きそうになった。

貞操観念そうグロテスク
布きれの下ブヨブヨの脂肪定まらない視線
まったくもって頭の悪そうな
ガキ以下の会話が成り立つ
そいつが紛れもない低脳そいつが紛れもなくさらす
それが問いかけてくるんだ答えは目の前の豚

吐き気をもよおすオマエ等の顔に
なにが平和なものか
ひきつらせてくれる日常の
ブレイン・シェイカーブレイン・ミキサー
（「ブレイン・シェイカーブレイン・ミキサー（電車）」より）

「事実を持っている」詩が事実をもたらした。

INTERVIEW：狂乱

「DOLL」５月号より

▶まあ実際、ハンクのとらえ方って、人それぞれとも言えますね
シュン「そのとらえ方か人それぞれ違うっていうのを、わかってなからも受けとめてなかったんたけと、自分たちは、本当に自分たちか感じたことの掻き溜めたと思ってて、でも一般的、世間的に、ハンクっていったら、何か古いものを受け継いで、そのままお決まりのアンチ・テーゼで、こういうことをやっておけは平気たろうとか、しょせん、それは“知識”。自分たちで本当に感じたようなことを歌っているような人たちは、そんなにいなかったような気かする」
シュン「音も詞先たから、こうしようとかしたものじゃなくて、自然に、詞と同時に」
▶歌詞はとこから触発されるのですか
シュン「それはもう日常じゃないてすか？生きていく上て自分の感覚か感じたものすべて」
▶結構、視野広いし、深いし 人間観察しているような感じもしますね
英郎「いや、それは周りかハカすきるから、こっちか賢くなったんてすね（笑）他のハントのことは言ってるんじゃないですよ。自分か生活してきてぶつかって感じたこと」
▶そんなにわかりやすい歌詞てもないと思いますけと ストレートてないような
シュン「でも、自分の中ではストレートたと思いますよ。屈折してるつもりはないし」
英郎「詞は自然に書いてて、思ったままの形なんで、詞か頭の中で回っているっていうか」
シュン「たから、遠回し的にとか、これは直接的に言ってやろうとか考えてから作ったんじゃなく、自然に出てきたものたけたから」
▶最初の時点て、音楽的にこんな感じにしようとかの考えはあったんてすか
全員「いや、それはないてす」
英郎「やっぱり感情の問題たから、たとえは、イヤたって感じたら、イヤたっていう音楽を作ってきたたけです。詞によるかもしれない」
▶たから、逆に整理されてなくて生々しいんてすね 政治的な視点ていうのは
英郎「昔は、ありました。国とか作っていく人か汚職してどういうことなんたって」
ジュン「政治的なこととかあえて歌にしようと思わないし、それをしたら今の時点ではそれは“知識”でしかないから。今気づいたことて歌詞か具体的って気かしないのは、その内容かたぶんひとつのものに対してというより、すごく全般的に当てはまるものか多いからなんですよ」

BOOK：マックス・ピカート著「沈黙の世界」（みすず書房）

●詩は沈黙から生ずる。だから沈黙への憧れを抱いている。詩は、自分自身と同時に、一つの沈黙からもう一つの沈黙への途上にある。詩はたとえば沈黙のうえでの一種の飛翔、沈黙のうえでの旋回のようなものである。
●詩人の言葉は、言葉がそこから由来したところの沈黙と、単に自然的に連関しているだけではない。詩人の言葉はまたそのなかに宿っている精神によって、みずから沈黙を生み出す力を持っている。言葉の創造作用によって、単なる自然であるに過ぎない沈黙が、もう一度精神の手によって繰りかえされるのである。言葉の対立物、つまり沈黙が、おのずからありありと現れるほど、それほどにも言葉は強力で、また完全無欠に言葉であることが出来るのだ。沈黙は言葉によって吸い寄せられるのである。つまり、完全な言葉の反響として、完全な沈黙が聞こえるのである。
●現代の詩はもはや沈黙との連関を失っている。現代の詩は言葉から生ずる。いや、ありとあらゆる言葉から生ずるのである。そして、ありとあらゆる言葉へうごいて行く。そこには大抵の場合、言葉によってもたらされるべき一つの事実さえもない。事実なるものはまったくないのである。事実は言葉でもって探し求められる。言葉は事実を追跡しているのだ。それに反して、真の詩人は事実を持っている。そしてこの事実から言葉を求めるのである。
●今日の世界には沈黙の実体は微塵もない。すべての事物は反抗的、脅迫的に、つねに同時に存在している。そして、この手に負えない過剰を沈黙のなかで埋没することの出来ない人間は、それを饒舌の真空のなかで、蒸発させ、没落させるのである。
要するに、人間から多くの事物の重荷をとり除いてくれるところの沈黙の実体が今日の世界にはないのである。だから人々はあまりにも過剰な事物を、あらかじめ人間から遠ざけようとするのだ。…たとえばひとりの人間のタイプを調べて、彼をもっぱらその素質に適合した事物とだけ結びつけようとする。現代人がタイプを、素質を確かめようと努めるのはそのために他ならない。（中略）
沈黙の実体を失った人間は、現代世界のだなで毎瞬間ごとに彼のまえにもたらされるところのあまりにも多くの事物によって攻めたてられる、と私は言った。実際、毎瞬間ごとに常に新しい事物が人間のまえに置かれることは決してどうでもよいようなことではない。何故なら、人間はそれらの事物に対していちいち自己を関係づけねばならないからだ。そして、人間が対象に対して答えることが出来るためには、人間はおのおのの対象に対していわば一種の愛(エロス)、一種の情熱を持たねばならないのである。しかも、人間は自分のまえにある対象に答えずにはおれないのである。それは人間の本性にとって必然的なことなのだ。ところが、もしあまりにも多くの対象が人間のまえに犇(ひし)き合うようなことになれば、そして、それらの対象の一部分がそのなかで消えてゆくことの出来る沈黙の実体が人間の内部にないならば、そうなれば対象を迎えるためには彼の愛(エロス)が、情熱が足りないことになる。かくて、もろもろの対象は故郷を失って人間のまえに脅迫的に散らばり、わだかまるのである。過剰な対象の殺到から人間を救出するには、精神分析学や深層心理学の主張するところとは逆に、人間をふたたび沈黙の世界との連関につれもどさねばならない。
●音楽のひびきは言葉のひびきのように沈黙に対置されているのではなく、沈黙と平行している。
あたかも、楽の音は沈黙のうえを流れてゆくようであり、また沈黙に推しうごかされながらその表面を滑ってゆくかのようである。
音楽は、夢みながら響きはじめる沈黙なのだ。
音楽の最後の響きが消えさったときほど、沈黙がありありと聞こえてくることはない。
（中略）このことがまた、何故に音楽が神経質な人々に鎮静の作用を及ぼすかということの理由なのである。――音楽は、人間の魂に一つの広さをあたえ、この広さのなかで魂は何の不安もなく、安心していることが出来るのである。